

## ローマ法王の「地獄は存在しない」発言について

Greatchain

2018/04/10

これは法王フランシスの公的発言ではなくて、唯物論者の友人との対話で言ったとされ、半ば公表を意図し、明言を避けている見解のようだ。しかし我々にはそれで十分である。悪に対する神の峻厳さでなく、神の慈悲深さを強調する彼の態度は、ペドファイル僧に対する、驚くべき寛大さに現れている（彼は「自分で自分を許せ」と言っている）。どんな犯罪者でも悔い改めれば、神は許して下さる、しかし悔い改めなければ、その者の魂は“消される”と言っている。これは厳罰のように見えるが、苦しまなくてもよいのだから、悪人にとっては有難いのではないだろうか？ なぜ「地獄」というような、普段は笑ってやり過ごすような話題が、いま問題なのか？ それは「純粹悪」「絶対悪」と呼ぶべきものが、いま我々の世界に、明らかに表面化してきたからである。この先に行き着くものは、地獄でしかないだろう。その定義が何であろうと、我々は地獄を避けて通ることはできない。

このような認識のできない人々、特に、唯物論者やジャーナリストに、これは通ずる話ではないことを、初めに断っておく。まず大きな前提として、時間は今、のんびんだらりと過ぎ去っているのではない。我々も、のんびんだらりと生きている時ではない。時間と世界は、今、ある方向に向かって加速的に進行していると考えられる。歴史には節目があると考えられる。多くの人が今、一つの歴史の節目を感じ取っており、これを終末とか、転換期とか、ハルマゲドンの戦いとか呼んでいる。何かが大きく変わらなければ、この時期を通過することはできない——かなりの人が、そう直感しているのではなかろうか？ これを、我々が大人になるための通過儀礼と考えることもできる。

私は、我々に与えられる苦痛は、基本的に、我々の霊的成長や“気づき”を促すための触媒であって、我々を懲らしめる懲罰ではないと考える。“地獄”の定義はそこに関わっている。もし地獄を、まるで復讐のように、悪い人間を苦しめるための特定の場所と考えるなら、全体で達成すべき目的をもつ宇宙という定義に、矛盾することになる。だから「永遠の地獄」とか「魂の消滅」という地獄概念は、ともに受け入れることはできない（少なくとも私には）。しかし地獄は存在すると考える。ただ、その場合の地獄は、生前に、人を苦しめて喜んだような者たちが自然に集まってできる（そして互いに苦しめ合う）共同体にすぎないという解釈を取る。そのような集団を作る者たちは、いわば重病のサイコパスであって、快癒への道、

健全な人間へ復帰の道は確かに遠いが、見放されているのではない。私はこのあたりの事情を、デイヴィド・ウィルコックの解説してくれる「一者の法」(Law of the One、Ra 資料ともいう) から教えられた。

我々の生まれてきたこの世界は、生きている間も、死んでからも、永遠の学習の場所であるようだ。そして、これも「一者の法」の教えによると、我々の生き方は、ネガティブとポジティブの2種類しかないという。一つは、もっぱら**自分に奉仕すること**によって、究極的に滅びにいたる、ネガティブな道。もう一つは、**他者に奉仕すること**によって、結局は自他ともに豊かになる、ポジティブな道である。これは簡単な理屈であり、頭ではわかっている、また個人として実践する人はいても、地球人が集団として、これを実践しようとする意欲を見せたことがない。すなわち、何百年たっても、何千年たっても、我々は“学習”しようとする意志を見せたことがない。そこで、「ネガティブな道」の究極の姿がどういうものであるのかを見せてやろうとする、宇宙的な意志が働く。それが今の状態ではないだろうか？

私が先日、NWO のインサイダーからの警告記事に「神は曲がった線を用いてまっすぐに書く」という、このインサイダー自身の使った言葉を、タイトルに選んだのはそのためだった。これは、「神は意図的に悪から善を引き出そうとする」という意味だと私は言った。そのように考えて、この悪なる世界の役者どもの、悪役ぶりを見ていると、これが、あまりにも芝居じみて見えないだろうか？ 何ものかが動かしているように見えないだろうか？ 彼らはあたかも、運命の歯車にぎりぎり巻き込まれたかのように、ハルマゲドンの決着へと急いでいるように見える。そこには中止の選択も、方向転換の道もないように見える。シェークスピアの『マクベス』という戯曲がまさにそうだ。大逆という悪を選んだ主人公マクベスが、悪の辿るべき滅びの道を、まっすぐに転がり落ちていく。3人の魔女が最初の場面で歌う、「きれいは汚い、汚いはきれい」つまり「正義は不正、不正は正義」という文句も、今のアメリカや欧州に、ぴったり当てはまる。不思議ではないか？ もうこれ以上、彼らは世界を騙し通すことはできない。

法王の地獄否定発言に戻る――。私は2016年初めに、戸別訪問をして布教をしている、ある宗教の幹部の方から、かなりの日数と時間をかけて、この宗教の解説を聞いた。(これは「貴重な個人的体験(2016/1月)」というエッセイになっている。)この宗教のおそらく最大の特徴は、来世は存在しない、我々は死ねば何一つ残らない、という唯物論的な教えである。これは、法王フランシスが、極悪人が悔悛しなかった場合、神から与えられるという「消滅」の罰が、すべての人間に与えられるようなものである。「死ぬことが最大の罰であって、善人も悪人も、慈悲ある神は区別をしないのだ」と、彼は言った。「それではこの宗教は、悪の限りを尽くすような者にとって、非常に有難くできているわけですね」と、私は言った。――おそらく、フランシスの宗教とこの宗教は、深いところでつながっている。